



原子力安全委員会委員

大阪大学名誉教授 住田 健二

巻頭言

実生(みしょう)の松

万国博覧会が北大阪で開催されたのは1970年で、私が永年勤務した阪大工学部が大阪市内からその北側の隣接地へ移転したのはその前年だから、もう30年近く経った昔話をさせて頂くことになる。

そこは何故か大都会近郊に未開発のまま残されていた土地で、竹藪とやや痩せ気味の松林を伐採して次々と新しい建物が建設された。広々とした新キャンパスに我々は胸を膨らませたのだが、整備された敷地に予想外の悩みが発生した。前のキャンパスからかなり大がかりに移植した樹木が殆ど根付かず枯れ始めただけではなく、こうした酸性土壌には強いからと選ばれた道路の側の“さつき”までなかなか根を張ってくれない。そんな状態でも、卒業生や定年を迎えた教授の記念植樹が実現して行くので、事情を知った我々は頭を抱えこんだ。結局は大量の土を埴土すれば、ある程度までは持ちこたえたと分かって、一応の対応策はたったが、それでも苗木はかわいそうな位、ひ弱くしか育たなかった。もと松林だから、大丈夫だろうと植えた松でさえその例外ではなかったのである。

そんなある時、私たちの学科の入り口の階段脇の芝生と雑草の間に、思いがけないことに小さな松が芽を出しているのが見つかった。残された松林から探し出した手頃な苗木を移植してもなかなか上手く根付かないのに、近くの何処からか飛んできた松の種が育ったのだ。発見した用務員の小母さんの報告にこれは縁起が良い、その近くにある我々の植えた記念樹の世話ついでに面倒を見て下さいよと皆で頼んだ。それから、この松は我々の見守る中ですくすくと育ち、通路に枝を張り出しては伐採して貰うという手間はかけながらも、見事な樹木となって今でも入り口の階段脇にしっかりと自分の場所を占めている。30年近い間、その周辺の場所には色々な植樹の試みもなされたのだが、もうひとつ冴えない結果となっているのである。今でも、私は元の職場を尋ねると必ず通る事になるこの樹の枝の下に立つと、いわゆる実生の樹の生命力にある種の感慨を感じる。

賢明な読者は、私が長々とお喋りした理由はもうお分かりと思うが、あえて蛇足を加えさせていただこう。先端的研究といえども、他所から探し出した手頃な苗木を移植するという方法ばかりではなく、自らの中から芽生えてくるものをそのように育てることを是非忘れないで欲しい。原研という大きな研究組織と多彩な分野に活躍する多数の精鋭の中には、きっと実生の松たるべき種があると信じている。

